

京都大学

上賀茂試験地における自動メール送信機能付きシカ囲いわなの設置の試み

フィールド科学教育研究センターの森林系施設では、全国の森林・里山地域と同様にシカによる植栽木や下層植生の過食害などが大きな問題となっています。この対策として、狩猟解禁期間以外での猟銃を用いた駆除（地元猟友会が実施）なども行っていますが、猟友会の負担や利用者の事故防止のための入林禁止措置が研究スケジュールの面などから難しいという課題があります。一方、囲いわなは研究利用者等の事故防止や無駄に動物を傷つけることを避けるという観点からも毎日見回りに行く必要があり、業務上の負担も少なくありません。そこで、上賀茂試験地では近畿中国森林管理局と共同で、囲いわな檻にシカが入った場合、自動でメール連絡してくれる鳥獣わな監視装置（見回り楽太郎・NTTPC コミュニケーション）の運用を行っています。

また、ゲート操作システム（AI ゲートかぞえもん・一成）と併用することであらかじめ設定した頭数が囲いわなに侵入することでゲートを落下させることができます。そのため、群れで移動する傾向のあるシカには効果的な捕獲が可能になります。

上賀茂試験地では、まず捕獲期間前に近畿中国森林管理局職員が事前に餌付けを行い、囲いわなへの警戒心を緩めさせます。稼働期間に入り装置からメールが来ると、試験地の職員が囲いわなに確認に行き、間違いがない場合は近畿中国森林管理局に連絡し、地元猟友会によって電気止め刺しで捕獲されます（上賀茂試験地は特定猟具使用禁止区域（銃））。

上賀茂試験地では、2015年1月の設置から現在（2017年11月）までに、シカのオス12頭、メス14頭（子含む）、イノシシ3頭を捕獲しています。囲いわな檻にセンサーカメラも設置し、シカが捕獲された際の周囲の様子も観察していますので、設定する頭数などが適切かを検討することもできます。より効果的な捕獲に向け、シカの行動パターンや被害がどの程度軽減していくかも合わせてモニタリングしていくことも今後の課題といえます。



写真：鳥獣わな監視装置（見回り楽太郎・NTTPC コミュニケーション）で捕獲されたシカ